



俳諧古辞談



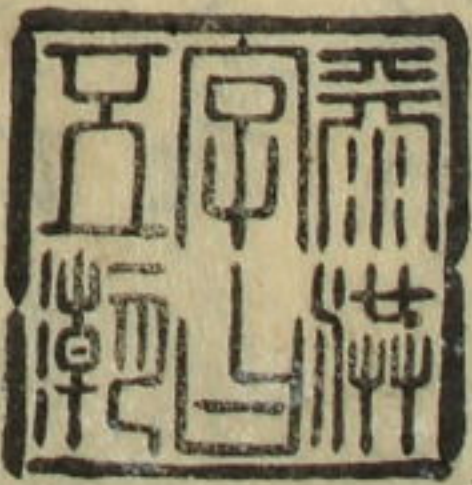
桐花園

序

桐花園

花のりぬ古き言の葉の種をり
すりまき人花のく研子耕一まき
新ふ其給い何ろや動る君懲惡
てあまんと何れも也詩歌連化け
四の物ありそふの夕々此るもの河け
た乃三枝の穂まをあたさや唐棣の
趣をそ咲あやまへて惡も母も考りも
言語ふとそ窮の安持もと舎と有る

字傳の山の吾も深き草ののちあは
はるべき言の成とももるは田
守島流来を入るおまひ
ちの



附言

- 一 茲一編を摩訶意生生の後たる所也蓋西席の
いと後二三子のつちよ族して道は由るをことしむ
書堂石海いまも生をいつまのそめを窺はといへとも
幸は今門牆の末ありてふおむるや一とあはれ子
ありうけりたる雀誦のあより敢て私をり則
一 剗剗氏は命して其社を回めし傳ふ
一 近以摩訶意中と云ふものち音を友の目し無
批上よりは言しとていし細ありとも哉最とく

附録 其抄本は相類する
古くも一巻のみの出まはれを自の傍に懸けたり只
集中光輝を伝へたり其を我々の訂補と
するよしとありて其の旨を自の決するに
もより其の旨を伝へたり

一 芝末より仙一編を載摩河をあり其の
後集草稿の抄より一駮を訪あり其乃
五體三法の傳授をも先を述より箇の口訣を
也 一 同物二名の附くも其の旨を文の一帳

中の秘物ありて其の旨を
好きは抱んと其の旨は第三の物尾を
六の數は満り自の決するに編首の鹹平
也 其の旨の味ひを其の旨へりて其の旨
へりて其の旨を其の旨の旨を示して編中
に課ありて其の旨を其の旨の旨を示して

其玉齋

書堂識



其五齋

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of a sutra or commentary. The text is mostly illegible due to fading and damage.

東都 摩訶憲珪山口述

念んての手をねんての修れどもふりやまを放は之十
^シと文字の^シ五三絶句と^シも^シ志名字二十^シも^シ女^シ情と
^フ西の^シを^シう^シいと假名十七字^シも^シす^シと^シ風^シ情^シを^シ毎^シ古^シを^シ流^シし
^シ不^シ精^シを^シ一^シふ^シた^シの^シも^シは^シ沙^シち^シの^シを^シも^シ中^シに^シ入^シる^シ童子^シ好^シも^シも
^シ亦^シ有^シり^シる^シ我^シ負^シ須^シ在^シとい^シひ^シ亦^シ左^シに^シ解^シを^シし^シる^シを^シ案^シ九
^シと^シの^シ或^シ日^シ余^シの^シ同^シり^シ教^シを^シは^シ其^シの^シ古^シ語^シ傳^シ流^シの^シ故^シも^シも^シと^シ佛^シ流^シの
^シも^シあ^シる^シと^シ其^シ格^シ式^シあ^シる^シも^シ也^シ答^シ曰^シは^シ道^シ流^シの^シ一^シも^シも^シ手^シ次
^シ未^シ終^シの^シ規^シ矩^シあ^シり^シ數^シの^シ準^シ繩^シの^シ先^シ哲^シの^シ仙^シ書^シも^シ粗

心一 朝のわらわら

此はふたはな

賢傳の

糟粕ふりた

周之夢 為胡蝶 與胡蝶 之夢 為周 與周 與胡蝶 則必有

分矣 此之謂物化 斯のこゝある

是も 昭り心の左右あひ

糟粕はあり

一の隙

周も

おろ

ま

是則

是則

是則

是則

是則

是則

是則

右とてさくら 事や 都

山家も信は教人と後

都あつていふ物言をわく

一いふとてさくらもあつて

と偶由りあつてあつて

紅葉の歌よ ぬのしつらつ

筑士の埴あつてあつて

流るるりつとあつてあつて

山のおもひをいふ筑甲の

筑甲の山家

いより能因法師乃む

線とて月もわくんち

斯しきなち糟粕を造ん

はふと本わししの頭

本わししわ峯よわ

松の詩の口生

本わししわ 年法の琴

あつてあつてあつて

又ほして居るやと

淵明の糟粕よりわし 借此語の

やうく枕もとん唐のくさの堅い

むくし〜あもわ〜い花乃ちも

とひひ出ても童のわ〜む〜あ〜と〜と関東

へるやまより此發句の斯い〜年〜歳〜花相似のはれ糟

粕〜終〜〜ん〜此諧の句は假多一二字のあ〜ん終〜

造る〜は誤句はふ〜此之字〜糟粕はあしは喜友

秋を〜ら〜〜い〜え〜り〜か〜〜あ〜の〜あ〜〜

とは花の葉と稱ふ〜句あつ

爺々山蔭ハ川あつと菊乃ち耶

斯いひあ〜も〜も〜と〜と〜と此発句 爺々山へ柴刈り蔭

川へさ〜たく〜も〜唐人〜身〜え〜ん〜と〜と〜とふれと菊は終

爺蔭のくけ合山宗隱幽のさぬ動〜〜〜〜〜〜〜〜

翁を脱ん酒狂の人子對〜〜いふ酔ふされ〜と〜と〜と

酒のさぬ人乃戯を遊〜向の〜いふ御醉ふされ〜と〜と〜と

誰り笑を舌ま〜〜〜朝今のを〜と〜と〜と〜と〜と

〜も〜ぬれ〜もの〜ゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あり其娑情〜ま〜川 源氏物語空蟬の〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一句の化もあらずし 業平の珠

切句化を附きしあらずは色すし 一句は中中の作

きりーはあらず

君ふりてしとてまにに挿入す

此もせは附きしあらずし 一句と蘇業ふりて

くし金に 切句しけ切しあらずは色すし 一句は

あらずし 一句と平生の化す

乃たをれしとてあらずむ

前句 しのびしし月乃照りし

夏の附句小李白の詩をさしよきて 萬マンの夜コノロキ

秋の屋 斯いし出て附きし 一句も詩のこと

軍イクサのるきし 砦キタ跡セき 斯句化を附きしあらず

一句の化きりあらず

夫乃 留きし 乃まぬきしもの

斯あは 長安一片、月萬戸、擣衣聲、秋風吹、不夫總

是玉関情、何日平胡虜、良人罷遠征、出らるる

一は秋の ちぬ火のはきし ことトビ高タカは

人のまじし 女房のみさし

前句 遙あらずし 庭

爰の附句に八島原平の戦ひを詠ふものありて「引杖千

形次の市々惶々て 町に出来は附句も一句心成衰記

と讀くこと 味方も市々を何なるも 斯の附句

附句を故するも一句此化をあら

棧ありし市々矢文すの勢ん

斯附を遙よりやく庭よりふりむむのふとも見え

たぬぬ檀の浦の軍をひよせぬひ 籠栗して「見えも

あはれ見もぬ人のまきと といふものなりむきなり

あはれんをわらふあはれはふ 舞妓の棧ありて

前句 宿うりよはは借さぬ村に

爰此附句は江口のしほの事を詠ふものあり

杖つくと西行と歌 町に出来は附句も一句を

あるれと 世を捨きぬ 園位上人が句化

をば一句は句に化をあら

西行歌乃 棧ありし市々

斯附は「かたもれや」我をむ君が那と詠をむ

のーを詠ひ梅の小雨もあし面白と懐力の筆をあら

あはれを此附句のまきとひあらん 又古語と其まは附句

もありしをあらと附句の附句此の酸味あは

夕の白やすく暮のひかり 純の袴

野州様抄
始白

源氏物語夕影卷

よりて見えはるるも見えたるふも
な乃くえつふ暮の夕の白

海老のくまのく 新風れはく美也

始白

晋王子猷居山陰時夜雪初霽月色
清朗詠左思招隱詩忽憶戴逵夜
乘小船請之經宿亦至造門不前
而反人問其故曰本乘興而行興
盡而反何必見安道耶

夏のくくや暦のりくぬ里よさく

全
龜童

山中無曆日寒盡不知年

太上隱者

鏡子あつち妻もあつちふ麦畠

野及氏家
錦河

伊勢物語

むさし一匹はらふもあつち妻もあつち
妻もあつちふ麦畠

い詠くの雨もさきぞきり言ひあはれ

上及藤名
箕由

無門関 平常是道頌曰春有百花
秋有月夏有涼冬有雪若無
閑事挂心頭便是人間好時節

我の年々々々せり置て様々那

全

素明

年々歳 花相似歳々年々
人不同

劉廷之

も月おれやゆふへのを詠を並せし

全

猶甫

もるらしは庭のあきらふ風をさえて

柘葉ふもむさおのいろく那

賀経公

短歌のすさみあり 曇乃志

全

湖曉

秋の萩ももききものとはり合の

影思ぬ人のいふありわらわ

能因

ぬき向は麻のちり糸やんこ香

上其持岡

米宜

さよしちを何小もとく小麻あ

深山乃さよれ明く流る

惟宗廣言

清波のぬ寺り空あり喜のこれ

魂柳

花宮仙梵遠微々月隱高城

李傾

鐘漏稀

こけ綿のえ飛日あし秋の今

奥及村田

得壽

秋風起兮白雲飛草木黃落

漢武帝

兮雁南歸

兼乃より一 蒐うへき林婦人

遠及示用

枕司

司天主簿徐肇過蘓氏子徳哥
者自言善為返魂香但死經十
年已上則不可返矣

八月の浪よ乃あーて千るう南

相及中田
魚尺

小東千る浦けしひちく浪のよ

かきく月とて返さるり

醍醐入道
大政大臣

蓮もくや依く訪く月の門

合
竹茶

鳥宿池中楳僧敲月下門 賈島

沖くも鷓鴣の羽尾や江磨の秋

総及溝原
巴蓼

宮女如花滿春殿只今惟有

鷓鴣飛

李白

お風の買人もふく時雨う那

全
巴水

六月買松風人間恐無價 東坡

五葉山又出らるるかこの一葉

梅川

達磨忌や池よりみちの一葉舩

野州西方
不玉

碧岩録 舉梁武帝問達磨大
師如何是聖諦第一義磨云
廓然無聖帝曰對朕誰磨云
不識帝不契達磨遂渡江至

魏

新坊と友さと流るるの舟

野及久我
不戚

峯頭望山月 伍頭思故郷 李白

み月雨やるぬき此友の枕を

野及半田
松齋

つゆとほさみとれは日さるる
朝の音乃音をくもりて

通後

さなとくや樓をのりて

松齋

山虚風落石樓静月侵門

杜甫

音えくると 杉子茶一高 可る之形

野及半田

深うぬれし 杉子茶をくると 可る之形

蘆川

浅くぬれし 杉子茶をくると 可る之形

茲道 法親王

一椀の形 杉子茶一や 河豚汁

蘆川

替山在 投子會下 為柴頭投子

一日与茶 乃曰森羅萬象在 這

裡許柴頭 深却茶曰森羅萬象在

什麼處 投子曰可惜一椀茶

誰夢の日本へ 年々やのんこ

全 月氣

また年々 杉子茶をくると 可る之形

季廣

三日目 杉子茶をくると 可る之形

誰夢の日本へ 年々やのんこ

全 五風

北風湖上来 雪片大如鷺

于鱗

其徳の 杉子茶をくると 可る之形

其刺之強小う〜ぬ〜 棘の心

野及麻沼

文車

大智度論 破戒人譬如清涼池
而有毒蛇不中浴亦如好花菓樹
而多逆刺_上

三日月也 漁_上のさめ小藻川兵

野及鯉山

鯉水

書經武成武王伐紂紂之前徒倒
戈攻于後以流血漂杵

拜殿_上 祢豆_上の、不_上村夕時百

武及款用

衆把

六根清淨被 天照太神乃宣久人彼
則天下乃神物奈利須掌靜謐心彼則
神明乃本至他利

野州朽木

立明

鏡の目や櫻_上れ_上の_上の好き_上い

科頭箕踞長松下白眼看他世

王維

上人

——
新勅選

武只崎西

琴詩

夕の暮れに秋の暮れに

夕の暮れに秋の暮れに

花色如蒸栗俗呼為女郎聞名

全
以言

戲欲契借老恐惡衰翁首似

源順

霜

眼
秋の夕の尾花小

全
祇翠

秋の夕の尾花小

秋の夕の尾花小

敏行

垣結

周

全
以秀

愛蓮說 菊花之隱逸者也

周茂叔

周茂叔

朱子云此は彼岸より此岸に

駿及鞠子
吾潮

秋氏語草木國土悉皆成佛

志くもくもく人よりあつた橋涼

吾流

方丈記 かくみの素の體と絶妙

一言 志くもくもく人より

蓮の葉やまを花より遠く

昔流

釋氏語 十萬億土去此不遠

孫多叔の朱を奪ふや窗の意

吾流

論語陽貨篇 子曰惡_二莖_一之奪_二朱_一
也惡_二鄭_一聲之亂_二雅_一樂_二也惡_二利_一口之
覆_二邦_一家_二者_一

露のこもく泡れこもくや女郎を

野原沼

槿馬

金剛經一切有為法如夢幻泡
影如露亦如電應作如是觀

晚清よわのぬふもや麦の秋

槿馬

侍らひみゆけ申清のまきけは

小侍後

何うぬ別のとりも物うハ

い〜ま〜あ〜くや梅乃風

梅乃風

古今集序傳山廻照るる池

まやは清くれもまのまもまし
たとは清くあるまなりと

ねひやむもあつた〜や夏柳

夏柳

枕字子まきす〜たもの
い〜ちか〜た〜まのわ〜ろ

入〜月〜の〜枝〜の〜ま〜ぬ

人よりも 志ものいふる 山法之耶

武

聽雨

穀梁傳 人之所以為人者言也

人不能言何以為人言之所以

為言者信也言而不信何以為

言

淮南子 一葉落而天下知秋

如鏡

淮南子 一葉落而天下知秋

多殿乃馬はあへき柳之柳

子交

公子風流 嬾錦繡新裁 白紵

作春衣 金鞭留當誰家酒

拂柳衝花信馬歸

雍陶

猿よりく悲きく秋あり郭ひ

子交

楚塞餘春聽漸稀 斷猿今

夕讓沾衣

寤寐

食や飯焚もの蟹をうる

松隣

春城無處不飛花
寒食東風
御柳斜日暮
漢宮傳蠟燭
青烟散入五侯家

韓翃

相名乃嚏のうはるおまが

お隣

徒拙草
あゝ人海をくまひり
うらみ平一老と
おれ危のゆきつらき
多かりうらみうらみ
道なきうらみうらみ
いひまゝのゆきつらきは

屠蕪平一雜煮うらみうらみ宿の妻

龜求

仲尼曰君子中庸小人反中庸
注中庸者不偏不倚無過不
及之名

名月やを折ふ御溝あり

龜求

却羨落花春不管御溝流
得到人間

李建勳

こほ

火子孫あけの付て和室

梅人

夜深吟罷一長吁老淚燈前
濕白鬚

白居易

賣之の安てとふ

種りて

山

逸士傳許由隱箕山無益器以

手捧水飲之入遺瓢得以操飲

飲訖挂於本上風吹漚漚有聲

由以為煩遂去之

妹、家のつたふも立て紙舞

普成

堀川院百首むくく思妹うほまら

あなうつをますもふ蓮のこころ

初夜は夜と老をさくかけ出のこころ

普成

老色日生面歡暎日去心今

既不如昔後當不知今

普成

金箔のよろこび

湖堂

今昔物語 近きもの御所寛蓮と僧基の上の宇多院と今令の清まらぬをかけたの小
一基と遊べり家ある村天皇負ふを恨み
寛蓮の枕を捨てしるるをさきかへ上人
追つるも奪んとしむ村寛蓮は
たくみあはらへさるかのまを懐より
ちかへ井も扱入さぬ

五位 誘るまむのまらぬや志賀乃秋

岷水

舟載集 漣や志賀の神はあれを

むらまらぬれはとらふ縁を

蓴や 何れも多し魚ん魚の味

馬卵

晋陸士衡入洛請王濟、指羊酪
謂曰、吳中何以敵此、答云、千里
蓴羹、未下鹽豉

瓜むらや女あゝ乃小長刀

文立

荀子 猶以指測河也、形以戈
春悉也

花より出る白河の景

書山

都もは夜と共なる

秋もくふくき川の一

能因

此酒のち更なる

書山

不是花中偏愛菊此花開

後更無花

元慎

山多此ころも酔う聖分南

吟口

山多此ころの流るる

乃をかりし

頓阿

長櫃を一掉す

保契

無名抄む

何たる夏の風

秋をたす

乘りまりまりまり遊ぶにありし鯉

魚鱒

列仙傳 琴高善鼓瑟行消彭之術
浮游冀州涿郡間二百餘年後
於水旁設桐屋果乘赤鯉來祠
且有萬人觀之一日復入レ去

白雨子 蛇も升まし登りりま

日平

易 乾為天九五曰飛龍在天
利見大人

二月山の葉もつもの神もも

東女

柏木卷かた木も葉もりの神も
まりも人もまりまりまりの木もへも

白の手鏡の巾もも

女
錦川

何来雙鬢雪五月鏡中寒便
欲煩君鑷蕭、不可看

于鱗

雨の人

雲より降りて 床に降り

書堂

あゝまると人のまゝらふよふにふれは
花もまたらのをれとて我見れ

攝政左大臣

歌僊

白雲の側とて我見れふの月

普成

むらゝもか 朝月を論

珪山

世のわらふ新米食ふ言ふ起る

書堂

さきと卯をも度ぬるハカ

成

斧の音きくぬ 椎櫃の日槍

山

眺むる花も雨は 殿もさき

堂

桃灯も雨の天窓のゆへは

成

さきと利居る記

山

似鳩は買れくくく

半

舟の流るるハ浮るる

成

今あらし木履の足ぬき

山

鼻はまじしと以敷の夕々禮

堂

羽織忌言あらし天狗も花よき

成

嘘つき初も洒落齋

山

しつらへち細く来るとあれん

堂

あらし河蝦貝をとくし

成

差ちしらがし月本武者

山

百日咳の来と申れとも

堂

終一丈もあらし

成

さるさるを藤の蔭の山中

山

軍兵もはし隙なく

堂

二三年もあらし

成

人て度々の女房漬もの

山

紅指裏もあらし

堂

嗚呼と鳥の松

成

富士山も頭をあけ

山

富士山も頭をあけ

堂

是のち中世秋のありて清し
寫存るを起すもの毎や雪也
鳴呼るや字記あるをたふす
誠嘆也 形如唐風之秋
叢菊亭 柔柳把



書林

日本橋通三町目

吉文字屋次郎兵衛

